北海道や地域の歴史・文化を学ぶプログラム

「もりもり探検隊」

１．趣　　旨

フィールドワークやワークショップを通して、地域の豊かな歴史や伝統、文化などを学習しながら、先人の生き方や知恵などについて理解を深めさせる。

２．期　　日

平成２６年１０月１１日（土）～１３日（祝）　２泊３日

３．主　　催

道立青少年体験活動支援施設ネイパル森

４．参加対象

小学校４年生～６年生　２０名

５．参加実績

参加人数　２１名

ボランティア　４名

６．プログラム内容

	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	
11日			受付	開会式	オリエンテーション	昼食	①ストーンサークル見学 ②発掘調査事務所見学 ③発掘調査体験				夕食 交流	入浴	振り返り まとめ		就寝準備	就寝
12日	起床 朝食	①ストーンサークル再現 ②稲刈り体験 ③縄文土器炊事体験			昼食	①まが玉作り ②縄文紙芝居 ③インタビュー			①映画の構成 ②記事の作成 ③映像・音声の収録		夕食	入浴	映像・音声の収録		就寝準備	就寝
13日	起床 朝食	部屋点検	発表準備	映画 発表会	閉会式											

７．活動の様子

本事業は、「フィールドワークやワークショップを通して、地域の豊かな歴史や伝統、文化などを学習しながら、先人の生き方や知恵などについて理解を深めさせる。」ことをねらいに実施した。小学校４年生から６年生の男女２１名が参加した。開会式後のオリエンテーションで、もりもり探検隊員に重要なミッションが与えられた。午後からミッションを達成するべく調査活動が始まった。はじめに、森町鷲ノ木ストーンサークルを見学、森町教育委員会社会教育課の学芸員の案内で遺跡全体を望み、その大きさに驚いていた。「どのように作ったのか？」「何のために作ったのか？」という疑問、課題をそれぞれ抱き、次の調査場所、発掘調査事務所へ移動した。発掘調査事務所では、現在までに出土した縄文土器や石器、展示された歴史資料等、学芸員の説明を聞きながら取材をした。外では発掘調査を体験し、土器の破片を採掘、復元作業をした。作業の難しさ、発見したときの感動を味わった。ネイパル森へ戻ってからは、１日目の調査活動を振り返り、作文にして発表した。また、映画の一部の撮影も行った。２日目は、ネイパル森の敷地内での活動。はじめ

にストーンサークルの再現を試みた。隊員同士で話し合い、協力して石（煉瓦）を運び、円に並べた。意思疎通がうまくいかず苦労した場面もあり、昔の人々の思いを体感することができた。次にオニウシ縄文会の磯尾氏の指導で石器を使った稲刈り体験、縄文土器で煮た芋、玉子、うどん、雑炊を食べた。

午後からは、ストーンサークル研究会の安井氏の指導でまが玉づくりをし、同研究会が製作した縄文紙芝居の読み聞かせをした。その後、２日間で体験・取材した縄文時代の生活を映画にまとめる活動が始まった。作文にまとめ、発表、役割分担をして演技、撮影と就寝時刻ぎりぎりまで集中して取り組んだ。最終日、隊員の司会で完成した映画の上映会。参加者の保護者、関係者から「子供たちの頑張る姿を見ることができて感動した。」という感想をいただき、隊員は、喜びの表情を見せていた。作成した映画をＤＶＤにして、全員に送ることを約束し、もりもり探検隊は解散した。

８．参加者の声

〇私はこの２日間でわかったことや学べたことは、北海道の縄文人がとても深い考えをもっていたことと縄文人が何かをするときや何かを作るたびに自分の思いを大切にしていたことを学べたり、動物を捕った後も骨を黒曜石を砕くのに使ったりして一つのモノを無駄なく使っていることを学べました。

〇２日間を通して縄文時代の人々の暮らしのことが特に解りました。その中でもまが玉が縄文時代のアクセサリーだということを知ってびっくりしました。

〇学んだことはストーンサークルを見て、ストーンサークルの石は桂川の石だということを学びました。６０２個の石を運ぶのはとても大変ということを学びました。ストーンサークルを作ってそれを学びました。楽しかったことは発掘調査の土器を見つけるときに掘ったことが楽しかったです。

９．事業の分析と考察

今回は、学習的な内容を主としたパイロットプログラム事業であったため、参加者をどのようにして意欲的に取り組ませることができるのか考えるのが難しかった。先人の生き方、知恵を学び、現在の生活と比較し、活用していけるように体験活動を組み入れたプログラムを展開した。①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現の４つの過程を「探究的な取組」と位置付け、本事業では特に、④まとめ・表現の場面で映画製作を取り入れ、体験活動を展開した。「体験型縄文タイムトラベル」と銘打ち、ストーリー性を持たせ、役割（キャスト）を与えることで、参加者が主体的に活動し、撮影・編集もスムーズに進めることができた。また、作文に苦手意識を持っている参加者も、諦めずにボランティアに相談しながら一生懸命取り組んでいた。事業の最終日に成果が映画として発表されるということで、適度な緊張感が参加者のやる気を向上させたと推察する。実際に映画発表会では、視聴した保護者から「楽しく充実した学習会だったことがよくわかった。」「我が子の頑張りに感動した。」などと高評価をもらい、参加者は自信を深めていた。アンケートの結果から、事業の期間内に成果を実感できるものの評価が高く、まが玉作り、映画製作の評価が高く、事業の期間内に成果を実感できる活動を組み入れることは、効果的と言える。

１０．成果と課題

成果

・プログラムにストーリー性を持たせることで、子ども達が主体的に取り組むことができることがわかった。

・映画をＤＶＤに収録し、全参加者に配付したことで家庭でも事業について話し合う機会を提供できた。

・今回、初めてネイパル森の事業に参加した児童が、その後の事業にも積極的に参加するようになった。

課題

・映像作りが担当者のみでの作業となり、負担がかかった。今後同様の取組を進めるには、職場体制も含め、関連する諸事項を整理する必要がある。